

〈憎しみの連鎖を越えて〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

コーカサスの国ジョージア(旧グル

ジア)は、長年帝政ロシア、ソ連の支配の下にあったが、ソ連崩壊に伴って一九九一年に独立。その際、国の西側にあるアブハジア地域が独立を求めて紛争になった。これはその紛争時を背景に描く温かくも力強い感動作。戦争とは、いったい何なのかを静かに問いかける。

気候の温暖なアブハジアでは古来多くのエストニア人がみかん農園を営んでいたが、紛争が始まってからはほとんどが帰国し、イヴォとマルゴスだけが残っている。マルゴスはみかんの収穫が気になってのことだが、イヴォは「帰りたくないから」と言うだけで本当の理由を言わない。イヴォはマルゴスのみかんの木箱を手作りしている。

老いて一人暮らししながらイヴォの家はきちんと整い、料理もする。ここで収穫されるみかんは、日本の温州みかんに似て、皮が柔らかく甘みが強いとか。

たわわに実り、いかにもおいしそうだ。

ある日、アブハジアの兵士が車で乗りつけ、食べ物を要求する。イヴォは全く抵抗せず、言われるままにパンとワインを渡すと、兵士は礼を言つて去る。その後、家の周辺で散発的に銃撃戦があり、何人もの遺体が見つかる。二人は亡骸を丁寧にみかん畑や墓場に埋葬する。イヴォは「親族が探しに来たときのために」とそれぞれの身分証明書を取っておく。その中に重傷ながらもまだ息のある若者がいて、家に連れて帰る。

イヴォは、結局、二人の兵士を自宅で介抱することになるが、一人はアブハジアを支援するチェチェン兵アハメド、もう一人はジョージア兵ニカで、敵同士だ。

二人は互いに相手を殺すにとらみあうが、イヴォは家の中では戦わせないときっぱり。コーカサスでは、家主が力をもっており、イスラムのアハメドも

クリスチャンのニカもイヴォの意見には従うと約束する。

二人の負傷した敵兵同士を同じ屋根の下で世話をしながら、イヴォの日常は全く変わらない。それどころか、動けるようになった兵士らは改めてイヴォに乱暴な発言を謝つたり、薪割りの手伝いを申し出たり、素直で気のいい若者の表情を見せ始める。たまに冗談も出て、まるで家族のような雰囲気さえ芽生え始める。アハメドはチェチェン人の傭兵で、家族を養うために収入の多いこの仕事をしていることを打ち明ける。さすがイヴォの歳の功といふか人徳といふか、みんなここが戦場だということをお忘れてしまったかのような口ぶりだ。

だが、再び今度はロシア兵の団がやって来て、言葉のやり取りからついに激しい戦闘になってしまふ。ニカは死に、家族のもとに帰ってゆくアハメドの車をいつまでも見送るイヴォ。つくづく戦争の愚かさが虚しい。だがまた、何かしら人懐かしい温もりが、胸奥に残るのはなぜだろう。そして、戦争は人間の知恵で何とかできないものだろうか、憎しみの連鎖を乗り越えて、との祈りに似た思いが熱く湧き上がった。



『みかんの丘』

エストニア・ジョージア合作映画(87分)

監督: ザザ・ウルシャゼ

出演: レムビット・ウルフサク、エルモ・ニュガネン、ギオルギ・ナカシゼ、ミヘイル・メスヒほか

岩波ホール(9月17日~11月11日)ほか
全国順次公開